兵庫史を歩く No.37　（2023.6.4）

妖怪「鵺」に立向う男とは？

（1）闘龍灘

丹波山地に源を発する全長 96km の兵庫県下最大の河川である加古川の中流に位置する景勝地である。ゆるやかな流れが急に姿を変えて、激流が岩の間を波打って超える。その起伏に富んだ地形を、幕末の詩人梁川星巌は「激しい流れは、まるで竜が闘うようだ」と表現した。景勝地として「播磨鑑」にも紹介され、近世より文人墨客の来訪が絶えなかった。

ここは加古川舟運（※）の難所でもあったが、近世初期に岩盤を削り、それ以来滝野は高瀬舟が往来する中継地として栄えた

またこの地は飛びアユの名所としても知られている。筧を利用する「筧とり」や落差を作って集まるアユをくむ「くみ鮎」という当地独特の漁法がある。毎年５月１日に日本で最も早くアユ漁が解禁される。

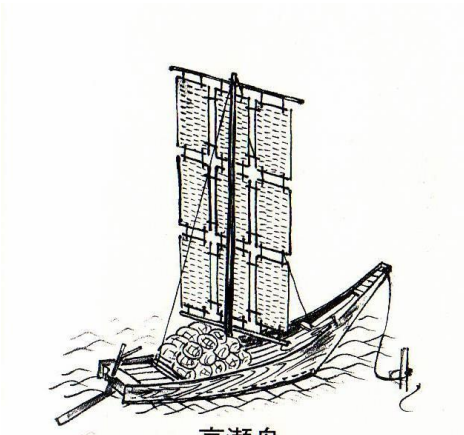
（※）加古川舟運

兵庫県で、川の長さと流域面積がともに最大なのが一級河川である加古川である。豊臣秀吉の天下統一により大坂が政治経済の中心地として一層重要になったが、当時はまだ東播磨や丹波の年貢米や織物、工芸品を中心とした物資を大量に運ぶことができなかった。そこで物流の一大動脈とすべく加古川に目がつけられた。

舟運には浅瀬の開削が必要で、二期にわたっておこなわれた。

・第一期

文禄３年（1594）地頭生駒玄蕃の命で滝野から高砂にいたる川底の浚普請である。通船を妨げる岩石を除去し、浅瀬に水路を掘り、これにより滝野から高砂港までの航路が完成した。この工事は阿江与助が請け負った。このため阿江与助は「加古川舟運開発の祖」と呼ばれている。



高瀬舟

・第二期

慶長９年（1604）姫路藩主池田輝政により、滝野から上流の開削が計画され、阿江与助と西村伝入斎が請け負った。こうして慶長 11 年（1606）には氷上町本郷から高砂までの約 50km が貫通し、加古川舟運は大いに発展した。

しかし滝野に闘龍灘があるために舟運は上流と下流に二分された。つまり、高瀬舟に満載された米は闘竜灘の手前でいったん陸揚げされて下流へ運ばれ、再び舟に積み込まれた。また木材の筏はいったん解体し、一本ずつ滝壷に落として再び組みなおして高砂へとはこばれていた。

このため中継地として滝野には問屋や蔵が建ち並びおおいに賑わった。

・掘割水路

明治５年（1872）村上清次郎らが難所である闘竜灘の岩盤掘削を新政府に願い出、翌年１月から工事が開始され、掘割水路が年末に完成した。長さ 180m、幅 8m、深さ 4mであった。この工事は仏の技師ムーセが担当し、ダイナマイトを使用した短期間工法であった。

これにより上流から下流の高砂までの一貫した舟運が実現した。

その後大正２年（1913）に高砂と西脇間に播州鉄道が開通した。この結果物資の輸送は鉄道に変わり、約 320 年続いた高瀬舟は役割を終えた。

（２）金城池～摩崖仏

市内最大規模の農業用のため池である金城池から長明寺に至る山林には、江戸時代の文政年間に開創された八十八ケ所巡りがあり、西脇市には珍しい摩崖仏もみられる。

（３）長明寺

白雉２年（651）法道仙人による開基と伝わる真言宗の寺院である。付近一帯は平安末期の武将で、弓の達人でもあった源頼政（※1）の所領であったことから、遺言により建てられたと伝わる墓が境内にある。

また、都に毎夜現れていた怪獣鵺(※2)を射落とし、退治した様子を再現した銅像がある。これは全国で唯一の鵺像である。

毎年４月 29 日には頼政をしのび「頼政祭」が地元民により開催され、頼政が弓の名人であったことから、地元高校生などにより弓が披露される。

（※1）源頼政とは

平安時代末期の武将・公卿（いわゆる宮廷武士）であり、歌人、弓の達人でもあった。頼政は清和源氏のなかでも源頼光の家系（摂津源氏）に属し、頼光の玄孫にあたる。

保元の乱・平治の乱後平氏が政権を握った時にも、源氏の長老として唯一中央政界に留まった。平清盛の信頼厚く、治承 2 年（1178）75 歳にして従三位（じゅさんみ）に昇進した。三位は高級貴族の証であり、四位以下とは栄誉や待遇がまるで異なる。本来清和源氏はなれない家柄であったが、長年源氏の長老として朝廷に仕えた功績と清盛の信頼もあって昇進が実現した。このため頼政のことを「源三位（げんざんみ）」とも通称する。

その後隠居し出家していたが、治承 4 年（1180）安徳天皇の即位をきっかけに、後白河法皇の第三皇子である以仁王が、諸国の源氏に平家打倒の令旨を出すのに応じて立ち上がった。しかし途中で計画が露見し、準備不足のまま挙兵を余儀なくされたこともあり、平家の追討をうけ、宇治平等院の戦いに敗れて自害した。

辞世の句：　**埋木の　花咲く事も　なかりしに**

身のなる果ぞ　あはれなりける

埋もれた木々に花がさかないように、自分の生涯も華やかでなく悲しいことである･････一般の解釈

頼政が奉じた以仁王の令旨が平家打倒の起爆剤になったことから、花を咲かせる生涯ではなかったが、しっかり実を結んだ最後であったとの解釈もある。

頼政の墓

・長明寺　　・宇治平等院　　・「頼政塚」･････京都府亀岡市にある

（※2）源頼政の鵺退治

近衛天皇（1139～55）の時代、夜な夜な宮中の屋根に正体不明の黒雲が現れ、鳴き声が聞こえて、天皇がそれにうなされる日々が続いた。薬も名僧たちの祈願も効なく、やがて雲の中に住む妖怪のしわざと考えられ、弓の名手源頼政に妖怪退治が命じられた。

頼政は信頼する部下の猪早太（いのはやた）一人だけを連れ、夜間の番をしていると、丑の刻

（午前２時頃）、噂の通り宮殿の屋根に黒雲が現れた。きっと見上げた頼政が力いっぱい弓をひき、「南無八幡大菩薩」と祈念して矢を放つと見事命中し、落ちてきた怪物を猪早太が止めをさした。灯りをともして確認すると、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎という化け物であった。

（余談）

①近衛天皇は鵺退治を大変喜ばれ、「獅子王」の号をもつ名剣を頼政に褒美として与えた。これは現在まで伝わっており、重要文化財として東京国立博物館に収蔵されている。

②鵺池碑

京都二条城近くの二条公園に、頼政が鵺退治に使用した矢を洗ったと伝承される池跡に碑が建てられている。

③鵺塚

頼政により退治された鵺の死骸は切り刻まれて、丸木舟で鴨川に流された。流れ着いた所には祟りが発生したといわれる。それが大阪の都島であり、兵庫の芦屋であった。

阪神芦屋の南側にある芦屋公園には、鵺の祟りを恐れ、供養した「鵺塚」がある。

（４）石上神社（いそがみじんじゃ）

古くは岩上（いわがみ）神社といわれ、それが近年石上神社となった。その起源は明確ではないが、正暦３年（992）とも治承５年（1050）ともいわれる。

本殿の背後には、長径 30m、短径 20m、高さ 5mの巨岩が突出しており、古くから信仰の対象になっていたようである。

毎年 10 月の秋の例祭の夜には、兵庫県の無形文化財になっている「なまずおさえ神事」が開催される。

（次回予告） **2023.7.9**

兵庫史を歩く NO.38　家島十景とは？

播磨：家　島

七言絶句で「播磨鑑」に紹介された名勝を歩く